

## 第7回体の動きを高める運動領域部会記録

参加者 畠中 岡田 山本 坪根 鈴木 関川 古川 興水 藤井 青戸 大川  
常任理事 高草木校長 佐藤校長

### 1 常任理事の校長先生より

〈高草木校長〉

実証授業Ⅰはその授業のよさがあるので、よく授業を分析していきたい。

今日の授業のよかったところ、課題を話し合い、実証授業Ⅱにつないでいきたい。

### 2 授業者自評

第2時までは、問いをもって学習課題を見いだす段階。

第3・4時では、巧みな動きに取り組み始めた。

第5時では運動が変わったので、本時では、運動のポイントに意識をもつことができるように働きかけた。

「問いを解決するためにすること」を学習課題と捉えている。

学級の子供たちは、問いをたくさん見いだしていたが、**問いを学習課題につなげているところが課題**であった。さらに、**学習課題として立てたことを実際の学習で行動できていたかが課題**である。学習課題とは別の運動の行い方をしている児童も見受けられた。

### 3 実証授業を参観して

本時は、運動が変わった時間だったのでポイント見付けに重点を置きたいと感がえた。

柔らかさは、単元の3時間目だったので、工夫をすることを視点として与えた。

### 4 柔らかさ

|        |                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ボール転がし | <p>最初は会話がなかったが、担任が介入してから、「どこが伸びている？」という会話が aumentata。担任がかかわることによって、自己調整しようとする姿が増えた。</p> <p>「脚を開いた方がいいか、閉じた方がいいか」、「ボールの大きさを変える」など伸びを実感できる。</p> <p>2人組では、同じ方向を向いていたので、向かい合わせることで関りが生まれたり、工夫が新たに生まれたりするのではないかな。</p>                                                       |
| 輪くぐり   | <p>1本ではなく、2本持っていた方が柔軟性を実感しやすい。しかし、二本の距離と高さが大切である。低めの高さでも輪をもてるようになると、違った伸びを味わえたのではないかな。</p> <p>最初、「伸びた？」と「どこが伸びた」という言葉掛けは有効であった。幅を広げるところで伸びを実感している様子だった。</p> <p>つま先を伸ばして、輪をくぐろうとしていた子がいたのを見て、教師がつま先に意識を向けたことで、他の子供たちは友達の動きをよく見るようになった。</p> <p>輪をどんどん高くしていたグループもあった。</p> |

担任は、「どう伸びている」という言葉を掛けていた。

「輪くぐり」は、もとの動きを2本にするとよい。

伸びている部位を担当が意識させていくことで、自己評価する視点を生むことができる。

運動を行う前に、課題を自分はどうかとらえているのかという「運動に取り組む前の自己評価」と運動を行いながらもう少し～すればできそうだという「運動中の自己評価」があるのではないか。

かわりをするすることでできる自己評価もあると考える。

## 5 巧み前半

|         |                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ボールキャッチ | 黒4はテニスボールで取り組んだが、テニスボールでケンケンキャッチしたが、できなかった。その後、この運動の行い方は本人として違うと思いやめた。<br>担任が「どうむずかしい？」と言葉を掛けても、子供からは答えは返ってこない。                                                                                                                                                            |
| バンブー    | できなかったのでストレスを感じている様子であった。<br>前半の取組の最後に、児童（青3）が「この運動は、つま先で跳ぶことがポイントなのではないの？」とつぶやいた。<br>担任が「どう？」と言葉を掛けると、タイミングを合わせるという児童が現れていた。                                                                                                                                              |
| スラッグライン | 先生の「体をどう動かせばいいの」という問いから子供たちは、工夫をしようとしているが楽しもうとして取り組んでいる様子だった。しゃがんだり、跳ねたり、目をつぶったりしながら移動をする子がいた。<br>2つのグループで交流をしたことで、重心に目を向けられるようになった。<br>入り口側のグループは、ポイントを意識して取り組んでいた様子であった。バランスを崩しそうになったら、「反対側に体重をかけるとよい」や「足を斜めに置きながら渡るとよい」と気付いていた。この時も、担任の「どうやったらできたの？」という問いかけでかわりが生まれ始めた。 |

そもそも、第2時からやっていないので、

「今日やってみてどうだった」と「今日の最初と比べてどうだった」という問い返しが大切。

目的を問い返していくと、子供たちの運動の行い方が変わっていくと考えた。スラッグラインでは、どのように渡るとバランスを実感しやすいのかという働き掛けが必要だと思った。

高まりについて「伸びた」は「柔らかさ」、「巧み」は「できた」で実感できるようにしていたが、数値的な高まりだけでなく、スムーズになったというような質的な伸びの実感を促していくとよい。

「できた」の先に「なんでできるようになったのか」を問うことでポイントの共有につながる。

## 6 共有（ホワイトボード）

|         |                                                                                                                                                           |
|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ボールキャッチ | あまり話ができていなかった。ボールを遠くに投げて、先に自分が輪に入ることが大切ということがポイントと捉えていた。                                                                                                  |
| バンブー    | 青1は、工夫していきたいという思いが強かった。その他の児童が、リズムが大切という発言から、みんなが「それ大切だね」と共感していた。<br>つま先で跳んだ方がよいのではないかと子と足の裏で跳んだ方がよいという子が話し合っていた。<br>結局、足の裏全体で跳んでいた子が、つま先で跳べるようになったことで論争は |

|         |                                                                                                                    |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|         | <p>終結した。</p> <p>「縄跳びと同じではないの？」という発言があったのがよかった。</p>                                                                 |
| スラッグライン | <p>重心が大切なのではないかと話し合っていたが、リズムや速く走るとできると話が進んだ。歩幅が大切という児童もいたが流されてしまった。</p> <p>入り口側のグループは、重心を中心にしてやるという気付きが生まれていた。</p> |

目的が抑えられているとよかった。バランス、リズム、タイミング、力の調整などの意識を促す働きかけが必要。

よい動きの共有が必要であった。ロードマップでは関連づいて見えているが実際のよい動きと比べてみていくことで、目的とよい動きがつながり、動きを価値付けていくことでポイント発見を促していけるようになって感じた。

よい動きの称賛・価値付けはこれまでのように大切になる。

比較をしてポイントを見ると言った子がいたが、実際に比べて運動を行っている児童は少なかった。

## 7 巧み後半

|         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|---------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ボールキャッチ | <p>黒の4は、バスケットボールに変えていた。ボールをいろいろ試していた。今日の問いは「ボールキャッチで何が高まるのかな？」というのがその子の問いだったので、いろいろなボールで取り組んでいた様子。</p> <p>前半も後半も児童同士のかかわりは少なかったが、いろいろな動きは試していた。没頭していた様子だった、個で取り組んでいたがそれぞれが自己調整している様子であった。</p> <p>いろいろなボールがあったから、試すこともできたし、「もっと〇〇したい」と思う子が現れた。</p> <p>運動に集中して取り組んでいたし、動きが変わってきたという子とは自己調整した結果だったのではないか。</p> |
| バンブー    | <p>「リズムと重心を大切にしているグループ」</p> <p>回転系の動きを試していた。回転した後の着地が難しかったし、縄が見えなくなるから難しいと感じていた。</p> <p>「つま先を意識することを大切にしているグループ」</p> <p>水色3が、足の裏全体で跳んでいたのに、つま先で跳んだ瞬間に友達から褒められた。「つま先で跳ぶと重荷がとれた。」とつぶやく。担任が「つま先意識しているよね」といった後に、グループの皆がかかとを付けて試してつま先で跳んだときと比べていた。そのあと、担任がもう一度現れた際に、「やっぱり、つま先で跳ぶと軽く動ける」と気付いた。</p>               |
| スラッグライン | <p>かかわりは前半の方が多く見られたが、目的意識は薄かった。前半は、リズムよくジャンプしていた子もいたが、後半は、ポイントを意識してゆっくり渡ったり、重心を意識して渡ったりする姿が増えてきた。また後半は、ポイントを意識して運動を行うようになった。</p> <p>前半は、言葉を通して、「こんな動きできる？」というかかわりが多かったが、後半は、ホワイトボードに書き込むポイントを意識して考えながら取り組む子が多くなった。ホワイトボードに書き込むポイントを通して、自分の動きを変容させていく（母指球を意識、腕でバランスをとる、目線を遠くに向ける、ゆっくり渡る）子が増えた。</p>          |

**動きのポイントが分かるから、自己調整することができる**

## 8 振り返り

部位に着目した振り返りと工夫の仕方に着目した児童を取り上げた。

「工夫を見付けられたただ、ポイントは見つけられなかった。」と発言した子がいたが、自分の取組をポジティブに振り返っていた。

## 9 インタビュー

今日の問いは解決できたの？とインタビューすると、「どこに投げればいいかが高まりそうだと思います。」という答えが返ってきた。

「バランスが大事だと思った。」と考えている子もいた。

## 10 今後に向けて

※バランス・タイミング・リズム・力の調整（コントロール）を先に抑えて、運動の行い方を考えていくのか、子供たちが運動に取り組みながらバランス・タイミング・リズム・力の調整（コントロール）の何を意識していけばよいかを実感していくか今後考えていく必要がある。

※「成果」学習過程（扱う運動の順番）はよかった。

動きのポイントが分かるから、自己調整することができる。

ロードマップの活用は、毎時間の始めに児童が見通しをもつために有効であった。

授業で扱う運動例を精選したことはよかった。

「課題」その時間に担任が「何を抑えるべきか」「その時間までに何を抑えておくべきか」について今後検討が必要。

※自己決定する場を与えることは大切である。自分で学習過程を決定していくことで自己評価する姿を促していけるのではないかと考える。

## 11 常任理事の校長先生より

<佐藤校長>

授業を見た人は、その授業のみで判断する。これまでの取組や見えないところについては語り合えない。どうしても、結果だけで見てしまうと、課題点が見えがちであるが、本時の授業は子供たちが主体的に自身の課題に向き合おうとする姿が見ることができ、質の高い授業であった。

部会の提案を整理するよい機会であった。

子供たちが、ポイントという視点で多くの気づきを生み、次の動きにつなげている。「気づき」も自己評価であると考えてるので、自己の気づきを見つめる時間を作ることで自己調整する姿につながると考える。

友達のかかわり合っ行うことの価値を深めてもらえるとよい研究になると考える。

自己評価は、気付いた瞬間から始まると考えるが、それだと範囲が広すぎるので、体動きを高める運動においては、「必要感」をもって振り返ることが自己評価する姿をして今後検討していく必要があると考える。